

書評 森まゆみ・松久寛『楽しい縮小社会 「小さな日本」でいいじゃないか』
(筑摩書房, 2017年)

伊藤公雄

縮小社会をアピールするには最適の本が出版された。「小さな日本でいいじゃないか」の副題がついた『楽しい縮小社会』だ。縮小社会研究会の代表幹事である松久寛さんと、研究会の東京での開催時にお話いただいている森まゆみさんの共著・対談本である。森さんの「過剰社会」「消費が美德」への鋭い批判と彼女の生活のなかから紡ぎ出される実践に、松久さんのデータに基づいた理論的な整理とが呼応しあって、絶妙な説得力を生み出している。

構成は、森さんのエッセイ「もはや成長の時代ではない」(第1章)「谷根千に見る小さな暮らし」(第3章)「私流暮らしの流儀-特に3・11のあと」(第5章)「五輪もダウンサイジングへ」(第7章)「足るを知るダウンサイジングの方法」(第9章)の間に、松久さんとの対談「縮小社会って可能何ですか?」(第2章)「エネルギーはどうしたらいいのでしょうか」(第4章)「人口が減ったら社会保障は困りませんか?」(第6章)「セーフティネットはどこにあるのでしょうか?」(第8章)が入る形だ。最後は、松久さんの「あとがき」で締められている。

森さんは、1954年生まれ。よく知られているように東京の下町である谷中・根津・千駄木に根をはった地元誌『谷根千』の発行で知られる。この雑誌、一時期は「売上げが年間1500万円くらいあって、そこから半分くらい経費で使っても、残りを3等分すればひとり240万円くらい、つまり月に20万円の労働報酬がありました」(133ページ)という、人の心をしっかりつかんだ民衆メディアだった。

一方の松久さんは、1947年生まれ。就職先も内定していた京大工学部卒業直前の4回生の1月、3回生のときに応募していたUSAのジョージア工科大学から交換留学の合格通知が来て、就職せずに留学、あれこれのアルバイトに加えて現在のおつれあいさんともアメリカで知り合ったのだという(55ページ)。松久さんとは40年以上のつきあいだが、こんなエピソードを聞いたことがなかったため、面白く読んだ。

お二人とも戦後のまだ白モノ家電の普及していない時代に育ったこともあり(かくいう評者は1951年生まれで、ちょうど二人の間の世代である)、日本が消費社会に入る前の時代をよく知っている。松久さんの言うように、われわれが子ども時代だった1960年の生活水準で、けっこうハッピーだったという共通経験をもっているというわけだ。とはいえ、今の若い世代にとって、1960年が「それなりの生活水準の時代」だというのは、ちょっと想像の外かもしれない(実際は、若い世代の「モノ」離れ、消費離れは着実に進

行しているようなのだが)。縮小しつつハッピーな生活をどう構想するか。それを制度面(もちろんベーシックインカムなども視野にいれつつ)や技術の面(イノベーション)の裏付けをもって語り続けていく必要があるとあらためて思った。

個人的には、興味深い記述にも出会った。たとえば、本書の冒頭で、森さんが須賀敦子さんについてふれている。森さんが、「後ろ向きに前進しよう」という宣言をした『抱きしめる東京』(1993年)で、「駐車場を作るより車をもたない」「地下を掘らず、地下水や井戸水を大切にすること」「鳴り物入りの公共施設を一つつくるより、地域に小さな歩いていける施設を分散すること」「建物は新しく建てるより、直して使うこと」などの提案をしたときのことだ(他にも、「夏はクーラーをつけず窓を開ける」とか「ゴミ焼却場を増やすより、ゴミを徹底して減らす」など、役に立つわかりやすい提案が並んでいる)。

この本の書評(当時、須賀さんは朝日新聞の書評委員だったはずだ)で、須賀さんが「とうてい賛同できない」と書いたのだそう。個人的にもつきあいのある須賀さんから「まゆみちゃん、こんなに便利になりすぎたら後戻りはできないわよ」と言われたともいう。須賀さんが、「車の運転をする」ことも、批判の背景にはあったようだ。

個人的に、須賀さんは1970年代後半からよく存じ上げている。イタリアつながりで、まだ、彼女が「有名」になる10年以上前からのおつきあいだった。一緒にイタリア旅行をしたこともあるし、京都の自宅にお招きしたことも何度かある。ただ、もし須賀さんがご存命なら、きっと縮小社会について、当時よりももっと理解してもらえたのではないか、などとも考えた(彼女自身、森さんとよく似た「無駄」を嫌うシンプルライフの実践者だったから、なおさらそう思う)。

須賀さんを契機に、森さんは、国民投票でのイタリアの原発廃止のことも、また、スローフード運動が、イタリアから生まれたことにもふれている(森さんの、国際的な環境問題や政治についての知識が豊富なことも、松久さんとの対談でよくわかる)。

本書の最後の方で、松久さんと森さんは、「戦争と軍事技術」の問題にふれている。松久さんがよく言う「飢えなかった」「戦争がなかった」「身分的差別がなくなった」「成長の時代が続いた」(本書27ページ)という「幸運な」戦後日本社会が、今、揺らぎ始めているのである。なかでも、「武器輸出三原則」の改悪「防衛装備移転三原則」への転換や、安全保障法の制定など、戦争・軍事の日本社会での急浮上に対して、縮小社会という提案は、どのような形で対抗していくのか。この間話題になった「軍事研究費」の急増と研究者や研究機関の研究受託の問題も含めて、今後の縮小社会研究の大きな課題になるはずだと思う。

値段は、税抜きで1500円。わりと気軽に読める本なので、ぜひ身近な一冊として読んでいただきたいものだ。